

○大方丈〔東西十七間半、南北十三間〕仏間〔阿弥陀尊の立像を安置す、安阿弥快慶の作なり。蓮華極彩色の画は狩

野主馬助尚信の筆なり〕拜間〔金張付松に鶴の極彩色にして、画工前に同じ〕上段〔床画瀑布見李太白、中彩色、画工

同前〕中段〔画は鉄拐張果郎、筆は前に同じ〕下段〔画は劉女西王母、画工は狩野外記信政の筆なり〕鶴間〔金張附松

に鶴の画、極彩色、狩野尚信の筆なり〕梅間〔金張付、画は梅に雉松に鳩、極彩色、画工は狩野興意法橋定信筆なり〕

裏上段〔金張付、画は梅に竹音呼、極彩色にして尚信の筆なり〕菊間〔金張付、菊の画、極彩色、狩野政信の筆なり〕

鷺間〔金張付、柳に鷺の画、極彩色、画工同前〕柳間〔金張付、柳に燕の極彩色、法橋定信の筆なり〕

坐禅石〔大方丈の庭にあり。昔慈鎮和尚此石上に坐禅し給ふとぞ。此石初は山門の下にあり〕

○鐘楼〔本堂の東南にあり、方四間瓦葺、延宝六年十二月十五日供養あり〕洪鐘〔高一丈八尺、巨九尺、厚九寸五分、

銘六字名号、靈巖上人の筆。寛永年中これを鑄る〕輪藏〔本堂の東にあり、伝大士普建普成を安置す。藏経は福州開元

寺の藏本なり。此所は元和五年に草創しけり〕

○鎮守八幡宮〔相殿は天照太神、春日、山王、熊野を祭る。満誉僧正の勧請なり、又愛宕、辨財天を祀る、旧誉上人

の勧請にて、都て七社なり。宮守の居所を真葛庵といふ〕

○山門〔元和五年の御造建なり。寺説に曰、三解脱門に準じて三門と書す、三門は空門、無相門、無作門をいふ。門

上に安ずる所は宝冠釈迦仏、長五尺、脇士は善財童子、須達長者、及び十六羅漢なり〕

○下乗 「石彫、藤木甲斐の筆なり。徒然草に曰、退凡下乗の卒都婆、外なるは下乗、内なるは退凡なり」

○桜馬場 「山門通をいふ。旧は祇園の神領なり。延宝七年代地ありてひらく所なり。路傍の桜は江州膳所の城主本多康将これを寄附し給ふ」

○鉄盤石 「山門の下にあり。伝云、三条小鍛冶宗近鉄盤にもちひたる石なりとぞ。此石いにしへは子院靈雲院の外林中にあり、此所に刃の水あるによつて貞享元年十月此所にうつす、刃の水前編に見へたり」

○阿弥陀堂 「山門の上にあり、旧は東の山上勢至堂の前にあり。宝永七年此地に移す。本尊阿弥陀仏坐像にして、春日仏師稽文会稽主動が作なり。いにしへは大和国百濟寺（大安寺といふ）本尊なり。正徳二年義山上人伝来してこゝに安ず。初め安ずる所は立像五尺運慶の作なり、今本堂脇壇にあり。又堂内に伽藍神の四天を安置す、多門、持国、増長、広目なり。是又義山上人享保三年に寄する所なり。天藻の蟠龍の画は海北友竹斎の筆なり」

○古墳 「阿弥陀堂の北にあり、五輪の石塔婆、高さ九尺五寸、地輪方三尺五寸、これ何人の為に建るといふ事を知らず。扶桑略記に曰、上東門院を大谷に葬るとあれば此陵ならんか。又一説に曰、是今の五条太子堂の開山相州鎌倉極楽寺忍証の墓なり、元太子堂当山にあり、近世までかの忌月には太子堂より衆僧来つて法会を修すとぞ、今は絶ぬ。無銘のゆへに或説をなす、後考あるべし」

本堂廻桜樹 「淀の城主永井信濃守大江尚政これを植る」

影向石〔法然上人御臨終の時、加茂太神此石上に降臨し給ふ〕

○元祖御廟〔東の山上にあり、賜蓮堂となづく。此名義は法然上人伝記に曰、上人御往生の後、其年三月十四日の夜一人の女夢見る事あり、其夢に上人の廟堂に参りたれば、庭に色々の蓮華あり、かくて一人の老僧ありていまだ開けざる蓮華一莖をあたへて、此地に詣せんものには此花をあたふべし、これ極楽往生の数に入べきしるしなり、此事普く人に示すべしと宣ふ。婦人掌を合て是を受ると思ひて夢覚ぬ。此御告に駭きてかの墳墓に尋ね参るに、夢に見し地景に露たがはざりければ、信心浅からずして此よしを世に伝ふるに、御祥忌を迎て歩を運ぶもの貴賤市をなし、袖をつらねて仏恩を謝す事を知る故に、知恩院といへるなりとぞ。それより年々御忌を迎て法会を執行し給ふ。後柏原帝鳳詔を賜つて法則を定め、宜法然上人の御忌を修すべしと云云。今に至つて天樂を賜り、其式永く違ふ事なし。笏拍子にて行導念仏あるも亦此所謂なり〕

○太子堂旧跡〔塔中光玄院の地なり、後世五条下寺町にうつす〕

太子杉〔同所の後にあり〕太子水〔知恩院御門跡殿舎の前にあり〕

地藏尊〔塔中西養院にあり、三条小鍛冶宗近持念仏なりとぞ〕

○本願寺旧趾〔山門の北桜馬場の地なり、親鸞聖人御廟の跡は塔中崇泰院の後にあり。前編に見へたり。本願寺の記に曰、文永九年聖人の息女覚信尼の建立なり。寺務は覚信の息覚恵法師、それより代々を経て、文明三年二月十六日山

徒の為に破却せらると云々」

○蜩唄 「ひがしの山上五町許にあり」

東山知恩院といへる山上にて

心敬所々返答案　なけやけふ宮古を庭のほとゝぎす　撰　政　殿

真葛原まくづがはら 「知恩院ちおんゐんの山門さんもんのまへより南、円山まるやま長楽寺ちやうらくじのほとり祇園林ぎえんばやしまでをいふならん」

我恋は松をしぐれのそめかねてまくづが原に風さわぐなり　慈　鎮

〔此歌は慈鎮和尚坐禪石じちんおしやうざぜんのうへに坐して詠給ふとなん。新古今集には、大僧正慈円じやうじゑんと見ゆ、これは元の御名なるべし。歌のこゝろは季吟翁八代集きぎんそうの抄に曰、恋人の難面を松とし、我おもひかくるをしぐれとして詠るなり。我恋はといふ詞は呼び出して、松をしぐれの染かぬるが如くなりといふ五文字なり。真葛原まくづがはらとおもひかけてもつれなく色もかはらねば恨る許といふ心なり。真葛はこゝろ多く一筋ならぬ事にて、さはぐといふ字力あるなり。恨るこゝろのつよく切なるをいはんためなりとぞ〕

続後撰　かれはて、言の葉もなきまくづ原まづがはらなにを恨の野べの秋風　西　園　寺

新拾遺　今ぞしるまくづが原まづがはらに吹風のうらみも恋にうくる物とは　道　智　法　師

新後拾遺　まくづ原露のなさけもとゝまらず恨し中は秋風ぞふく

従三位忠兼

〔右の抄に名所にもありと侍りけれども、化野、千代古道のたぐひなり。世のあだなる事には化野をよみ、君が代の久しきを千代古道跡はありけりとながめ、恨るこゝろのさわぐを真葛原まくづがはらとつゞけたり。後世名所にもよみたれば、今はこゝかしこと云囃し、此ほとりの名とはなりけらし〕

東山安養寺詠眺望

一とをり夕日に晴てめにちかき山よりたかきをちの川水

逍遙院

長楽寺碑銘

東山勝景。大悲靈境。遠臨神州。邇覘鷺嶺。花雪香。

竹苞月冷。片石維貞。勒銘伝永。平信好撰

大江資衡書